

■ シェーンベルク／浄められた夜 Op.4

アーノルド・シェーンベルク（1874-1951）は独学の作曲家で、19世紀末の不穏な政治状況を背景とした爛熟した文化のなかで創作を開始した。のちに無調から12音技法を発明したことで20世紀の前衛音楽に新たな地平を切り開くことになるが、《浄められた夜》はごく初期の作品で、後期ロマン派のスタイルによる標題音楽と言っていい。

リヒルト・デーメル（Richard Demmel）の詩を知って衝撃を受けたシェーンベルクは、1897年の歌曲に始まり、デーメルの詩に基づく作品を次々と作曲する。1899年に弦楽六重奏曲として作曲された《浄められた夜》もその一つで、デーメルの第3詩集『女と世界』所収の詩が楽譜に掲げられている。林を歩む男女の会話で、今は愛していない男の子を身ごもっていると告白する女性に対して、男性は温かい許しを示し、自分の子として出産してくれと語る。音楽はこの詩に描かれたドラマをたどるかのよう、冒頭、息詰まる緊迫感でスタートし、やがて透明で清らかな響きに変化し、男女を照らす月の光を表象する。これを最初に弦楽合奏版に編曲したのは1917年。その後、コントラバスのパートを改訂した版も作られている。

全体は変形されたソナタ形式とみなすことができる。二短調で始まる導入部は2人が月明りの中を歩む情景を描写し、第1ソナタの提示部第1主題（二短調）と第2主題（ホ長調）で女が過ちを告白する。展開部で調が不安定になるあたりで、女性は自分の罪深さや男からの拒絶を恐れている。短い再現部のあと第2ソナタとなる。提示部第1主題（二長調）と第2主題（嬰へ長調）で大きくて温かい男性の寛大さが示される。展開部では男の決意が示され、授かった子どもが浄められ、自分の子として育てようという想いが伝えられる。第2ソナタで使われる素材は、第1ソナタに出てきたものの変容であり、また、半音階的な響きは長調による全音階的な響きに解消され、二長調で終始する。

白石美雪

楽器編成：弦五部

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。